

看護理論の実践への活用に関する能力の育成

— 学生の認識に焦点を当てて —

Fostering the ability to apply nursing theory to practice

— Focus on student perception —

鍵小野 美 和¹

Miwa KAGIONO

鈴木 茉 央¹

Mao SUZUKI

柴 田 年 広¹

Toshihiro SHIBATA

中 村 恵 理¹

Eri NAKAMURA

堀 口 久 子¹

Hisako HORIGUCHI

足 立 はるゑ²

Harue ADACHI

要 旨

本研究の目的は、看護学部1年次の授業科目「看護理論と看護実践への活用」の履修後における学生の内面に形成された看護理論に関する認識を明らかにし、教育活動上の成果及び課題を明らかにすることである。

本調査により、学生の看護理論に関する関心は88.4%と高く、実践に活用したい意思も高いことが明らかとなった。受講後の学生の内面に形成された看護理論に関する認識として【看護理論の必要性】【看護実践への活用】【援助の取り組み姿勢】【よりよい看護の追及】【自己を高める】【今後の展望】【理論家の人物像からの刺激】の7カテゴリーが抽出された。

看護理論は難しいと言われているが、1年次においても看護理論の意義や活用意思等の認識がもて、将来の自己の在りかたを模索する姿勢を築くことが可能であることが示された。

はじめに

看護理論とは看護という現象を記述し、説明するものであり、看護における知識を体系化し、看護に関する現象を明確かつ具体的に説明する枠組みである¹⁾。理論を用いること

により、現象をより深く探求でき、予測や対象者の理解等に役立つことから、根拠のある看護実践を提供できると言われている²⁾。

理論と根拠に基づく実践は、あらゆる専門的学問分野に共通した特質である。したがって、看護も専門的学問分野の一つであることから、看護理論の実践への活用は理論的な推論を持つことによって、看護の方向性や予測

¹金城学院大学看護学部看護学科

²金城学院大学看護学部看護学科非常勤講師
(元修文大学看護学部教授)

を容易にし、対象者の個性に応じたより質の高い看護の提供に資することが可能である。

しかしながら、現在、日本に紹介されている看護理論は米国の看護理論家から発信され、翻訳後、日本に導入された性質上、用語が難解であること、臨床現場での指導者が少ないこと、あるいは学生時代にこれらを学んでいない看護師もいることから看護理論の臨床現場での活用や検証は十分ではなく、いまだ、研修や事例研究の範疇にとどまっている感がある。このような現状の中、看護に有用な理論について学生のうちから、その活用の意義を理解し、臨地実習において活用を試みることで看護の対象者の理解や根拠のある看護実践に繋がる可能性が高くなると考える。

看護理論の実践に関する先行研究としては、臨床における看護師の看護実践、精神看護学領域やがん患者と看護師のかかわりについてHildegard E.Peplauを用いて分析しているもの^{3, 4)}、ストーマを抱える患者のセルフケア獲得への援助についてキングの目標達成理論を活用しているもの⁵⁾等が散見されるが、事例研究による看護介入や振り返りによる取り組みが多く、理論活用の試行レベルの感がある。一方、看護学生を対象とした報告では2年次以後の学生を対象とし、臨地実習における学生の学びの分析⁶⁾、患者の理解^{7, 8)}、看護過程への活用⁹⁾等に学んだ理論を活用している。主に臨地実習における実習記録、プロセスレコードを用いた分析といった方法を用いているが、報告数は少ない。

根拠のある看護実践につながる看護理論を臨床で活用するにはまず、理論活用の意義と活用可能な場面を認識できることが必要であり、1・2年生の看護実践の基盤づくりの時期に系統的に取り入れる必要があると考える。しかし、先行研究ではこれらの研究は見当たらない。そこで、本稿は1年次の講義

「看護理論と看護実践への活用」の履修後に学生が看護理論に関してどのような認識を持つことができたかを調査した。本研究の結果から、今後の看護理論活用能力育成上の貴重な資料が得られると考える。

I. 研究目的

本研究の目的は授業科目「看護理論と看護実践への活用」の履修後、学生各自の内面に看護理論に関してどのような認識が形成されたかを明らかにし、教育活動上の成果及び課題を明らかにすることである。

II. 用語の定義

本研究における「看護理論に関する認識」とは、学生が提出した課題レポートに記載されている看護理論に関する思い、考え、感情、意欲などをいう。

III. 研究方法

1. 研究対象：研究対象は2022年度看護学部看護学科前期授業科目「看護理論と看護実践への活用」（授業実施期間：2022年4月～7月）受講者108名の既存の資料（学生が提出した課題レポートおよび調査用紙）である。
2. 調査期間：課題レポートは2022年7月19日～7月26日までに提出されたものであり、調査用紙による質問紙調査は2022年7月15日（発表会終了後）に実施した。
3. 授業の概要：研究対象とした授業「看護理論と看護実践への活用」は科目の教育目標を踏まえて次のように展開した。その概要は22世紀に求められる医療・看護のあり方と課題を踏まえて、看護理論の意義と看護理論の歴史、ナイチンゲールの看護論と業績、主な看護理論家等の講義5回、グループワーク5回、グループワークの成果

発表4回とまとめである。講義の際には毎時の課題を提示し、看護理論のイメージ化を意図したDVD視聴2回を取り入れた。

4. グループワークの概要：1グループ6～7名、計15グループとし、1教室に5グループ、計3教室を使用し、アドバイザー教員3名～4名を配した。内容はグループメンバーで学習を深めたい理論家を選択・決定し、図書館及びWEB利用による調べ学習と意見交換をした。最終的にグループごとに学習成果をパワーポイントにまとめ、発表した。
5. 発表会の概要：発表会は1グループ15分、質疑応答5分とし、運営は学生に委ね、学会形式で行った。授業担当以外の教員の参加を促した。
6. データ収集方法：データは下記の既存の資料より収集した。

既存の資料①：課題レポート：最終発表会終了後の4日後に学生が提出したレポートであり、テーマは「私が選んだ看護理論と実践への活用の検討」である。データ収集内容は「看護理論に関する認識・興味関心」、「実習や看護実践において活用したい理論」、「今後の抱負・自己の課題」に関する内容とした。

既存の資料②：質問紙調査は、最終発表会終了時に調査の趣旨、協力を説明・依頼したうえで、学生の自由意思に基づき無記名で記載を求めた。質問項目は①看護理論に関する関心、②臨地実習での活用意思、③発表会の有益性であり、これらの項目について各4件法「大いに役立った～全く役立たなかった」により回答を求めた。

7. 分析方法：既存の資料①レポートは質的記述的分析とし、内容を精読し、文章中に「思った」「考えた」「感じた」「気づいた」「わかった」等、学生が認識したと読み取

れる上記収集内容を抽出し、コード化した。抽出されたコードを5名の共同研究者で意見交換をしながら内容の共通性・関連性をもとにサブカテゴリー、カテゴリー化し、抽象度を高めた。既存の資料②質問紙は質問項目毎に記述統計をし、検討した。データの信頼性を保持するために研究者間で意見の合意を得るまで検討を行った。更に質的研究のスーパーバイザーのアドバイスを受けた。

8. 倫理的配慮：調査協力者（学生）には学習管理システムより研究についての説明（目的・方法など）を書面にて行い、研究協力への同意を確認した。説明は調査協力者（学生）に心理的な圧迫や調査データに影響が生じないように、科目の成績評価終了後にオプトアウト方式により実施した。また、その際、協力への同意をしない場合または協力の中断（同意の撤回）の申し出により同科目を含め、一斉の成績に関係しないことや不利益を被らない事を明記した。本研究は金城学院大学の人を対象とする研究に関する倫理審査委員会の承認を受けて実施した（承認番号：第R22020）。

Ⅳ. 結果

1. 研究対象の背景

研究対象である資料の提供者は本校看護学部1年生で講義受講者は108名である。年齢は18歳～26歳、すべて女性であった。分析対象とした既存の資料①の提供者は108名（100%）であり、既存の資料②の提供者は69名（63.9%）であった。

2. 看護理論に関する学生の認識

看護理論に関する学生の認識をカテゴリーとしてまとめた結果、資料①の記述から表1に示すように20サブカテゴリーから7カテゴ

リーが抽出された。以下「」内は主なコードを、〔〕内はサブカテゴリを、【】内はカテゴリを表す。

カテゴリ【看護理論の必要性】には〔看護理論を学ぶ意義〕〔看護理論を学ぶことへの意欲〕が示された。〔看護理論を学ぶ意義〕には、「トラベルビーは病気や苦難の中にいる人々にどう手を差し伸べられるか考えられる人であり、トラベルビーのこのような考えは看護師を目指す者として深く学ぶべきであると考えた」「当初、看護理論がなくても看護はできると考えていたが、今では質の高いケアを提供するために、また患者の持つ問題を解決するためにも看護理論は必要不可欠であると考える」「看護理論を学ぶことによって、様々な観点から患者さんのケアについて考えることができる」「看護理論とは、あくまで患者さんの看護に迷ってしまった時、どのように対応するのがいいのかわからなくなってしまった時の道標だと考える」等といった看護の質向上や心の拠り所として看護理論を学ぶ意義を認識した内容が示された。〔看護理論を学ぶことへの意欲〕には、「これから看護師になるにあたって教科書に載っている理論以外にも学んでいきたいと思った。そうすることによってどんな場面でも適切に判断し行動することができるようになるから」「看護師として学び始めたばかりの1年生のうちに、このような様々な理論を知ることができたのは、これから看護の知識を学ぶことへの意欲へと繋がり、また、これらからの看護師として働くときに、有効な方法の一つとして自分の中にあることができる大きな可能性であると思った」「今のままでは、まだまだ理解をし切れていない部分が多いためこれからも学びを深めていきたい」等といった看護理論を学ぶことへの意欲が示された。

カテゴリ【看護実践への活用】には〔看護実践への活用の意義〕〔看護実践への意欲〕〔看護実践への具体化〕〔看護実践への活用の困難感〕が示された。〔看護実践への活用の意義〕には、「国際化が進む日本にはレイニャーの文化的ケア理論が必要だと感じた」「今回看護理論について深く学び、患者に合わせた援助方法について看護理論を自ら解釈し、発展させることで患者に合った最良の援助を見つけられるのではないかと考えた」「理論を活用することで、より人間のニーズに合った看護を提供することができることがわかった。また、看護活動において、その根拠は何かを求められた際に、看護理論に基づいてケアを行うことで、より根拠が明確化し、理論的に説明できるケアを行うことができると思う」等といった看護理論を看護実践へ活用する意義を認識した内容が示された。〔看護実践への意欲〕には、「セルフケア理論を活用していきたいと思った。患者さん自身が生命や健康などを維持するために諸活動を実践していくことが、身体的にも精神的にも早く回復が望めると思い実践してみたいと思った」「将来看護師になった際、外国人の方と接する際に文化ケア理論を用いたい」「キングの目標達成理論を用いながら患者さんとコミュニケーションをとり一緒に前を向いて、援助していきたい」等といった看護理論を活用した看護実践への意欲を認識した内容が示された。〔看護実践への具体化〕には「トラベルビーの看護理論である、人間対人間、対人関係論から看護実践における患者や家族との関係性の構築に関して活用できると考えた」「実習の場でキングの目標達成理論を用いて、患者とコミュニケーションを通じてお互いに情報共有をし、相互行為を図れるようにしていきたいと思う」「看護師としてペプロウの4つの段階を活用し、患者の病気

への向き合い方に影響を与え、その後の日常生活でも病気との付き合い方について援助していくために患者の普段の生活につなげられるように聞くことから始めたい」等といった看護理論の活用における看護実践への具体化を認識した内容が示された。〔看護実践への活用の困難感〕には、「私は、人間がもともと持っている適応レベルに焦点を当てることは、患者の状態をアセスメントしやすいと感じた。一方で、環境を宇宙レベルの広い概念で捉えていることや、広大な世界における人間の存在感を哲学的な前提としていることは理解しにくく、また、看護実践に取り入れにくいと感じている」「看護理論はアメリカで考えられたものが多いので、日本では合わないこともあるので、すべて鵜呑みにせず、日本で使うためにはどうすればよいのかを考えて使っていこうと思う」といった看護実践における看護理論活用の困難感を認識した内容が示された。

カテゴリー【援助の取り組み姿勢】には〔目標とする援助〕が示された。〔目標とする援助〕には、「ジョンソンの理論を活かして相手の不安や考えをより正確に理解できるよう、相手を思いやることができるような援助を目指して8月の実習を頑張りたい」「患者の表面的な部分にとらわれずに奥底までともに共有できるような関係を作れるように看護師としてできる最大限の援助を提供したい」「私はキングの理論から看護師として正しい知識を持ちながら、患者に丁寧な説明を行い、患者の治療意欲を促し、患者のニーズを理解し支援するため、患者の意思決定を重視したケアを行いたいと思った」「患者の意欲やモチベーションを高めていけるような援助をしていきたいと考えた」等といった援助の取り組み姿勢について目標とする援助を認識した内容が示された。

カテゴリー【よりよい看護の追及】には〔複数の理論の活用〕〔看護の方向性の気づき〕〔看護師の役割〕〔看護観の探求〕が示された。〔複数の理論の活用〕には、「ヘンダーソンとジョンソンの看護理論を併せて援助すると患者にとってよりよい結果を得ることができるのではないかと考えた」「キングの目標達成理論をトラベルビーの理論と組み合わせる用い、人と人との関係を持った患者と共に、同じ目標に向かった看護をしていくことで、より質の高い看護を行うことが可能になると考える」等といった複数の理論の活用を認識した内容が示された。〔看護の方向性の気づき〕には、「それぞれの理論家で何を中心とした看護であるかは違うが、共通しているのは患者の自立であると思った」「様々な看護理論を学び、どうしていくことが患者さんにとって一番いいのかを考えることができた」「看護理論を学び、看護とは患者が生活している環境や家族のことまで援助することが求められることがわかった」等といった看護の方向性の気づきを認識した内容が示された。〔看護師の役割〕には、「看護師の役割は多くあるが、あくまで、患者が、自身の健康に自信を持ち、日常生活へと戻るうえで、患者にとって一番近いし、サポートの側面が大きいのではないかと、私はこの理論を学んで考えた」「私がペプロウの人物像から学んだことの中で、これから特に大切にしていきたいと思ったことは、看護師は患者の成長を促す立場であるという考え方である」等といった看護師の役割を認識した内容が示された。〔看護観の探求〕には、「看護理論家の考えはどれも重要であり今後、私にとって看護とは何かを見つけていけるようにしたい」「このような理論は看護活動において、各々の看護観を作り上げる上で、基礎として土台に築くために重要な要素であるといえる」「これから

も、看護の学びに対して貪欲な気持ちで学習をし、本来の健康へと近づけるためのケアができるように、自分なりの看護観を見つけていきたいと今回の学習を踏まえて感じた」等といった看護観の探求を認識した内容が示された。

カテゴリー【自己を高める】には〔コミュニケーション能力を磨く〕〔気づく力を鍛える〕〔大学生活での様々な挑戦〕〔看護理論を発展させる努力〕〔視野を広げる〕〔患者と共に成長する〕〔自己の課題〕が示された。〔コミュニケーション能力を磨く〕には、「すべての看護においてコミュニケーション能力が重要であると思った。そのために大学生活では友人との深い信頼関係を築くことや他の学部生徒とのかかわりでコミュニケーション能力や教養を磨けるように努力したい」「看護理論を学ぶだけでなく、看護コミュニケーションについても学び、患者さんとコミュニケーションがしっかりと取れるようにしていきたい」等といったコミュニケーション能力を磨くことを認識した内容が示された。〔気づく力を鍛える〕には、「ヘンダーソンの理論を学び、患者さんが何を求めているかを見極め、患者さんのニーズに合ったケアができるように気づく力を鍛えていきたい」「今後行われる臨地実習で実際看護師がどう患者とかわりを持ち、援助しているか学び、細かなサインにも気づき察して行動に移せるよう日々、勉強に励んでいきたいと今回の学習を通して実感した」等といった気づく力を鍛える必要性を認識した内容が示された。〔大学生活での様々な挑戦〕には、「一見看護と関係ないと思うことでも、意外なところに看護の現場で生かせることが散りばめられており、常に様々なことにアンテナを張ることが大切だと気付かされた。そのため、大学での4年間は様々なことに挑戦し、そこから得た

学びをどう看護に生かすのか考えることが、看護学生として一番の学びになるのではないかと感じた」「これから多くの場面で活躍していける看護師になるために、自分から積極的に学ぶ姿勢を大切にしていきたい」といった自己を高めるための大学生活での様々な挑戦を認識した内容が示された。〔看護理論を発展させる努力〕には、「自らが実践を通して、トラベルビーの理論を発展させていけるよう努力していきたいと考える」「常に看護のあり方を追求する姿勢を持ち続ける必要がある、その姿勢こそがこれからの看護の質と看護学の上に繋がっていくと考える」等といった自己を高めるための看護理論を発展させる努力を認識した内容が示された。〔視野を広げる〕には、「将来、看護師として働くときに、文化の違う人でも、向き合えるように、まずは広い世界観を持つ人になりたいと思う」「これから看護を学んでいくうえで、看護師として働いていくうえで21の看護問題を解決できるようになれるように視野を広げて、学びを深めていきたい」等といった自己を高めるため視野を広げることを認識した内容が示された。〔患者と共に成長する〕には、「患者さんがどのような状況でも諦めず、生きる意味を一緒に考えて見出し、病気を乗り越えていける看護師になれるように努力しようと思う」「今回看護理論で学んだ事を活かし、患者が病気を抱えながらも、一人の価値ある人間として、“自らの力で自分の人生を生きていける”よう、共に歩んでいく担い手を目指して、心新たに努力する」「ペプロウの理論の4つの段階を知って一方的に看護サービスを提供するだけでなく、看護師も患者に影響を与えられており、共に成長していく存在だということに改めて気付かされた。この考えは患者と看護師の信頼関係を築くうえで心に置いておくべきことだと思った」等

看護理論の実践への活用に関する能力の育成（鍵小野美和ほか）

表1 抽出された学生の看護理論に関する認識

(n=108)

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	コード数
看護理論の 必要性	看護理論を 学ぶ意義	32-1 トラベルビーは病気や苦難の中にいる人々にどう手を差し伸べられるか考えられる人であり、トラベルビーのこのような考えは看護師を目指す者として深く学ぶべきであると考えた	88
		61-3 当初、看護理論がなくても看護はできると考えていたが、今では質の高いケアを提供するために、また患者の持つ問題を解決するためにも看護理論は必要不可欠であると考え	
		81-11 看護理論を学ぶことによって、様々な観点から患者さんのケアについて考えることができる	
	看護理論を 学ぶことへの 意欲	100-6 看護理論とは、あくまで患者さんの看護に迷ってしまった時、どのように対応するのがいいのかわからなくなってしまった時の道標だと考える 等	34
		52-6 これから看護師になるにあたって教科書に載っている理論以外にも学んでいきたいと思った。そうすることによってどんな場面でも適切に判断し行動することができるようになると思うからだ	
		68-2 看護師として学び始めたばかりの1年生のうちに、このような様々な理論を知ることができたのは、これから看護の知識を学ぶことへの意欲へと繋がりがり、また、これからの看護師として働くときに、有効な方法の一つとして自分の中にあることができる大きな可能性であると思った	
看護実践への 活用	看護実践への 活用の意義	62-6 今のままでは、まだまだ理解をし切れていない部分が多いためこれからも学びを深めていきたい 等	61
		5-2 国際化が進む日本にはレイニンガーの文化的ケア理論が必要だと感じた	
		32-6 今回看護理論について深く学び、患者に合わせた援助方法について看護理論を自ら解釈し、発展させることで患者に合った最良の援助を見つけられるのではないかと考えた	
	看護実践への 意欲	77-1 理論を活用することで、より人間のニーズに合った看護を提供することができるようになった。また、看護活動において、その根拠は何かを求められた際に、看護理論に基づいてケアを行うことで、より根拠が明確化し、理論的に説明できるケアを行うことができると思う 等	32
		78-1 セルフケア理論を活用していきたいと思った。患者さん自身が生命や健康などを維持するために諸活動を実践していくことが、身体的にも精神的にも早く回復が望めると思い実践してみたいと思った	
		82-1 将来看護師になった際、外国人の方と接する際に文化ケア理論を用いたい	
看護実践への 具体化	105-4 キングの目標達成理論を用いながら患者さんとコミュニケーションをとり一緒に前を向いて、援助していきたい 等	78	
	43-1 トラベルビーの看護理論である、人間対人間、対人関係論から看護実践における患者や家族との関係性の構築に関して活用できると考えた		
	51-4 実習の場でキングの目標達成理論を用いて、患者とコミュニケーションを通じてお互いに情報共有をし、相互行為を図れるようにしていきたいと思う		
看護実践への 活用の困難感	96-5 看護師としてペプロウの4つの段階を活用し、患者の病気への向き合い方に影響を与え、その後の日常生活でも病気との付き合い方について援助していくために患者の普段の生活につなげられるように聞くことから始めたい 等	2	
	58-1 私は、人間がもともと持っている適応レベルに焦点を当てることは、患者の状態をアセスメントしやすいと感じた。一方で、環境を宇宙レベルの広い概念で捉えていることや、広大な世界における人間の存在感を哲学的な前提としていることは理解しにくく、また、看護実践に取り入れにくいと感じている		
援助の取り 組み姿勢	目標とする 援助	63-6 看護理論はアメリカで考えられたものが多いので、日本では合わないこともあるので、すべて鵜呑みにせず、日本で使うためにはどうすればよいのかを考えて使っていこうと思う	39
		28-3 ジョンソンの理論を活かして相手の不安や考えをより正確に理解できるよう、相手を思いやることのできるような援助を目指して8月の実習を頑張りたい	
		31-5 患者の表面的な部分にとらわれずに奥底までもとにも共有できるような関係を作れるように看護師としてできる最大限の援助を提供したい	
		74-1 私はキングの理論から看護師として正しい知識を持ちながら、患者に丁寧な説明を行い、患者の治療意欲を促し、患者のニーズを理解し支援するため、患者の意思決定を重視したケアを行いたいと思った	
		97-3 患者の意欲やモチベーションを高めていけるような援助をしていきたいと考えた 等	

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	コード数
よりよい看護の追及	複数の理論の活用	28-2 ヘンダーソンとジョンソンの看護理論を併せて援助すると患者にとってよりよい結果を得ることができるのではないかと考えた	7
		42-2 キングの目標達成理論をトラベルビーの理論と組み合わせて用い、人と人との関係を持った患者と共に、同じ目標に向かった看護をしていくことで、より質の高い看護を行うことが可能になると考える 等	
	看護の方向性の気づき	8-4 それぞれの理論家で何を中心とした看護であるかは違うが、共通しているのは患者の自立であると思った	3
		13-3 様々な看護理論を学び、どうしていくことが患者さんにとって一番いいのかを考えることができた	
		25-3 看護理論を学び、看護とは患者が生活している環境や家族のことまで援助することが求められることがわかった	
	看護師の役割	95-4 看護師の役割は多くあるが、あくまで、患者が、自身の健康に自信を持ち、日常生活へと戻るうえで、患者にとって一番近いし、サポートの側面が大きいのではないかと、私はこの理論を学んで考えた	3
		97-1 私がペプロウの人物像から学んだことの中で、これから特に大切にしていきたいと思ったことは、看護師は患者の成長を促す立場であるという考え方である 等	
	看護観の探求	21-4 看護理論家の考えはどれも重要であり今後、私にとって看護とは何かを見つけていけるようにしたい	4
		67-6 このような理論は看護活動において、各々の看護観を作り上げる上で、基礎として土台に築くために重要な要素であるといえる	
		67-7 これからも、看護の学びに対して貪欲な気持ちで学習をし、本来の健康へと近づけるためのケアができるように、自分なりの看護観を見つけていきたいと今回の学習を踏まえて感じた 等	
自己を高める	コミュニケーション能力を磨く	17-3 すべての看護においてコミュニケーション能力が重要であると思った。そのため大学生活では友人との深い信頼関係を築くことや他の学部生徒とのかかわりでコミュニケーション能力や教養を磨けるように努力したい	7
		81-14 看護理論を学ぶだけでなく、看護コミュニケーションについても学び、患者さんとコミュニケーションがしっかりと取れるようにしていきたい 等	
	気づく力を鍛える	20-1 ヘンダーソンの理論を学び、患者さんが何を求めているかを見極め、患者さんのニーズに合ったケアができるように気づく力を鍛えていきたい	3
		103-6 今後行われる臨地実習で実際看護師がどう患者とかかわりを持ち、援助しているか学び、細かなサインにも気づき察して行動に移せるよう日々、勉強に励んでいきたいと今回の学習を通して実感した 等	
	大学生生活での様々な挑戦	63-1 一見看護と関係ないと思うことでも、意外なところに看護の現場で生かせることが散りばめられており、常に様々なことにアンテナを張ることが大切だと気付かされた。そのため、大学での4年間は様々なことに挑戦し、そこから得た学びをどう看護に生かすのか考えることが、看護学生として一番の学びになるのではないかと感じた	2
		97-11 これから多くの場面で活躍していける看護師になるために、自分から積極的に学ぶ姿勢を大切にしていきたい	
	看護理論を発展させる努力	34-1 自らが実践を通して、トラベルビーの理論を発展させていけるよう努力していきたいと考える	3
		76-3 常に看護のあり方を追求する姿勢を持ち続ける必要があり、その姿勢こそがこれからの看護の質と看護学の向上に繋がっていくと考える 等	
	視野を広げる	38-1 将来、看護師として働くときに、文化の違う人でも、向き合えるように、まずは広い世界観を持つ人になりたいと思う	4
		105-5 これから看護を学んでいくうえで、看護師として働いていくうえで21の看護問題を解決できるようになれるように視野を広げて、学びを深めていきたい 等	
患者と共に成長する	29-6 患者さんがどのような状況でも諦めず、生きる意味を一緒に考えて見出し、病気を乗り越えていける看護師になれるように努力しようと思う	3	
	79-2 今回看護理論で学んだ事を活かし、患者が病気を抱えながらも、一人の価値ある人間として、“自らの力で自分の人生を生きていける”よう、共に歩んでいく担い手を目指して、心新たに努力する		
	90-1 ペプロウの理論の4つの段階を知って一方的に看護サービスを提供するだけでなく、看護師も患者に影響を与えられており、共に成長していく存在だということに改めて気付かされた。この考えは患者と看護師の信頼関係を築くうえで心に置いておくべきことだと思った 等		

看護理論の実践への活用に関する能力の育成（鍵小野美和ほか）

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	コード数
自己を高める	自己の課題	45-1 有効な患者との関係を築けるよう、日ごろから患者でなくとも「人間対人間の関係の確立に至る4つの位相」を気にしていこうと考えた	12
		60-6 その（理論を用いて患者に寄り添える看護を行う）ための自己の課題は、まだ病気についての知識がなく、今回考えた理論の活用法もまだ活用しきれていないと感じるため、これから様々な病気についての知識を増やすことである	
		97-10 今後の課題は、看護に対する知識を深め、様々な状況、人格に合わせた看護を提供できるように学び続けることである 等	
今後の展望	目指す看護師像	30-1 患者さんをひとりの人間として接している点が看護師になるにあたって重要な考えであり、これを活かせる看護師を目指したいと考えた	24
		33-3 患者さんを一人の人間として捉え“人間と人間”の関係に踏み出し、患者さんの持つ恐怖や不安、苦痛のサインに気づきたい	
		33-4 患者さんをよく観察し、こちらが先に患者さんの気持ちに気づくことで、この看護師は信用できる、何でも話せるという風を感じてもらえる看護師を目指したい	
		48-1 トラベルビーは、患者とのかかわりを大切にし、技術を磨き患者の要望に応えようという姿勢が素晴らしいと思った。私もトラベルビーのようなここまで患者第一に考えられる看護師になりたいと思っている	
		59-6 看護の専門的な知識を蓄えるとともに、より多くの看護理論を学び、患者1人ひとりにあった理論を活用しながら、より良い看護を提供していきたい 等	
理論家の人物像からの刺激	心に響く経験	14-1 キングの理論はキングの質の高い看護をしたいという思いが詰まっていたと思った	6
		21-1 ヘンダーソンの人物像から看護師になったのは兵士の役に立ちたいという動機であったことを知り感銘を受けた。自分もそのようにありたいと思った	
		81-1 レイニンガーの経歴を知り、文化的背景を考えた看護に着目することができるレイニンガーの視点の鋭さに心打たれた 等	

といった患者と共に成長することを認識した内容が示された。〔自己の課題〕には、「有効な患者との関係を築けるよう、日ごろから患者でなくとも「人間対人間の関係の確立に至る4つの位相」を気にしていこうと考えた」「その（理論を用いて患者に寄り添える看護を行う）ための自己の課題は、まだ病気についての知識がなく、今回考えた理論の活用法もまだ活用しきれていないと感じるため、これから様々な病気についての知識を増やすことである」「今後の課題は、看護に対する知識を深め、様々な状況、人格に合わせた看護を提供できるように学び続けることである」等といった自己を高めるための今後の課題を認識した内容が示された。

カテゴリー【今後の展望】には〔目指す看護師像〕が示された。〔目指す看護師像〕には、「患者さんをひとりの人間として接している点が看護師になるにあたって重要な考えであり、これを活かせる看護師を目指したい

と考えた」「患者さんを一人の人間として捉え“人間と人間”の関係に踏み出し、患者さんの持つ恐怖や不安、苦痛のサインに気づきたい」「患者さんをよく観察し、こちらが先に患者さんの気持ちに気づくことで、この看護師は信用できる、何でも話せるという風に感じてもらえる看護師を目指したい」「トラベルビーは、患者とのかかわりを大切にし、技術を磨き患者の要望に応えようという姿勢が素晴らしいと思った。私もトラベルビーのようなここまで患者第一に考えられる看護師になりたいと思っている」「看護の専門的な知識を蓄えるとともに、より多くの看護理論を学び、患者1人ひとりにあった理論を活用しながら、より良い看護を提供していきたい」等といった目指す看護師像を認識した内容が示された。

カテゴリー【理論家の人物像からの刺激】には〔心に響く経験〕が示された。〔心に響く経験〕には、「キングの理論はキングの質

の高い看護をしたいという思いが詰まっていたと思った」「ヘンダーソンの人物像から看護師になったのは兵士の役に立ちたいという動機であったことを知り感銘を受けた。自分もそのようにありたいと思った」「レイニンの経歴を知り、文化的背景を考えた看護に着目することができるレイニンの視点の鋭さに心打たれた」等といった理論家の人物像を知り、心に響く経験となっている内容が示された。

3. 質問紙調査の結果

1) 看護理論についての関心

調査協力者は69名(63.9%)であった。「講義、グループワーク、発表会を経験して看護理論について関心をもつことができましたか」について、大いに関心をもった

表2 看護理論についての関心

①講義、グループワーク、発表会を経験して看護理論について関心をもつことができましたか

(n=69)		
項目	人数	(%)
大いに関心をもった	22	31.9
関心をもった	39	56.5
あまり関心をもたなかった	4	5.8
全く関心はもてなかった	2	2.9
未記入	2	2.9

②臨地実習において理論の活用をしたいと思いますか

(n=69)		
項目	人数	(%)
大いに活用したい	32	46.4
できれば活用したい	37	53.6
活用はしたくない	0	0

表3 発表会の有益性

(n=69)		
項目	人数	(%)
大いに役立った	33	47.8
役立った	36	52.2
あまり役立たなかった	0	0
全く役立たなかった	0	0

が22名(31.9%)、関心をもったが39名(56.5%)、あまり関心をもたなかったが4名(5.8%)、全く関心はもてなかったが2名(2.9%)、未記入が2名(2.9%)であった(表2-①)。

「臨地実習において理論の活用をしたいと思いますか」について、大いに活用したいが32名(46.4%)、できれば活用したいが37名(53.6%)、活用はしたくないが0名であった(表2-②)。

2) 発表会の有益性については、大いに役立ったが33名(47.8%)、役立ったが36名(52.2%)、あまり役立たなかった、全く役立たなかったは0名であった(表3)。

V. 考察

今回、授業科目「看護理論と看護実践への活用」履修後に学生が提出した既存の資料①：課題レポートから抽出された7カテゴリー、20サブカテゴリーおよび質問紙調査の結果を元に考察する。

これらの分析により1年次の学生の看護理論に関する認識形成および教育目標の達成度等の成果と今後の課題について言及する。

1. 看護理論に関する認識について

抽出された7カテゴリーは【看護理論の必要性】【看護実践への活用】【援助の取り組み姿勢】【よりよい看護の追及】【自己を高める】【今後の展望】【理論家の人物像からの刺激】であった。

そのうち、カテゴリー【看護理論の必要性】【看護実践への活用】【援助の取り組み姿勢】は学生が初めて看護理論家の考えや経験、創造力を知ることによって看護の在りかたを考へる刺激になったと思われる(コード32-1, 81-11等)。その刺激によって、実際の現場においてこのように活用してみたい(コード51-4,

96-5, 105-4), このような援助を目標にした
い(コード28-3, 74-1, 97-3), といった意欲
や今後の取り組み姿勢が内面に形成されるよ
うな認識に至ったと推察できる。一方, サブ
カテゴリー〔看護実践への活用の困難感〕に
見られるように(コード58-1, 63-6) 現在邦
訳されている看護理論はすべて米国の理論家
によるものであることから国民性の違いや,
理論家が用いる概念や用語が難解であるため
の不安を示す記述も見られた。しかしなが
ら, 看護理論の究極的な目的は看護実践の活
用を通して看護実践の向上を図ることにある
ことから, 抽出されたサブカテゴリー〔看護
実践への活用の意義〕〔看護実践への意欲〕
〔看護実践への具体化〕が認識できたことは
今後の看護実践に繋がる上で有益な結果が得
られたと考える。

カテゴリー【よりよい看護の追及】は〔複
数の理論の活用〕〔看護の方向性の気づき〕
〔看護師の役割〕〔看護観の探求〕で構成され
た。それらの内容はコード「28-2, 42-2」に
見られるように学生は学んだ理論を複数用い
ることでより良い結果が得られるのではない
かといった提案や各理論に共通する視点とし
て“患者の自立”を見出し, 看護の方向性に
気づいていた(コード8-4, 25-3)。そして看
護師の役割について“サポートの側面”や
“患者の成長を促す”(コード95-4, 97-1)と
いった思考や今後の学びにおいて自分なりの
看護観を見出していききたい(コード21-4,
67-6, 67-7)等の内容が示された。これらの
ことから, 学生が患者のためにより良い看護
をするにはどうしたらよいかを思考し, 能動
的に取り組んだことが伺える。先行研究の斉
藤ら¹⁰⁾は経験を積んだ看護師が研修におい
て看護理論を組み込んだ教育を受講後に, 自
らの実践に偏りがあることや人間観の拡大を
自覚できていたことを報告している。看護理

論を学び活用することが看護の質向上に寄与
することが推察される。

カテゴリー【自己を高める】では看護実践
への活用や目標とする援助をするためにはど
のような能力が必要で, どんな努力が必要で
あるか等, 学生の主体的な取り組みや考えが
示されていると思われる。これらの内容から
学生は看護師にとって重要なコミュニケー
ション力や気づき, 大学生活での色々な挑戦
や努力をして自分自身を高めていく必要性を
認識していた(コード17-3, 20-1, 63-1, 76-
3)。そしてコード「79-2, 90-1」からは看護
師も患者から学び, 成長していくものである
ことに気づいていた。これは看護師に必要な
認識として重要であると考え。様々な患者
に関わる看護師は「病む人の心理」や「症状・
訴え」等は教科書からは学べない貴重な経験
になるものである。したがって, このような
認識をもつことで, 患者への関心を深め, 自
から患者に近づく努力ができるようになると
思われる。更にコード「45-1, 60-6等」に見
られるように, 現在の自分にとっての具体的
な課題を示し, 自己を高めようとする意思が
伺える。

カテゴリー【今後の展望】では学生の目指
す看護師像が明確に示されている(コード
30-1, 33-4, 48-1等)。これは看護理論を学び
看護の在りかたや看護の受け手のニーズ等を
学習し, 目標として将来の自己の姿を学生の
内面に描くことができた結果であると思われ
る。

カテゴリー【理論家の人物像からの刺激】
は学生が看護理論を理解する上での理論家の
生い立ちや経験等を知り, その歩みや看護へ
の情熱に感銘を受けたことが大きな刺激に
なっていた。コード「14-1, 21-1等」に見ら
れるように理論家の看護への歩みが学生の心
に強く響き大きな影響を与えたといえる。

2. 看護理論に関する関心と活用意思に関して

調査結果 (n=69) から学生の関心度は高く、88.4%であり、活用意思に関しては活用したい、できれば活用したいと100% (n=69) であった。このことから学生は看護理論の意義を理解し、活用することにより、よりよい看護を実践したいという思いをもつことができたといえる。

3. 授業科目「看護理論と看護実践への活用」の目標達成と今後の課題

授業科目の教育目標を表4に示した。本校看護学科のカリキュラムでは上記看護理論に関する科目が入学後間もない1年次4月から履修することになっている。その意図は、看護とは何か、看護師は何をするのか等の根本的な問いを見出していく方法として早期に看護理論を学ぶことで看護現象や看護の対象を理解する方策、看護の在りかたを考える糸口になると考えたからである。

一方、看護系大学の多くは看護理論が難しいとの理由から講義は2年次～3年次あるいは1年後期に組み入れている。本校ではそれとは異なっているが、今回の調査により、表1の授業目標は達成できた。更に調査結果に見られるように、学生自身が今後の大学生生活を主体的に取り組む姿勢や看護理論を活用してよりよい看護を迫及する実践者になろうとする意欲を示していた。このことから、単に看護理論は難しいからと敬遠するのではなく、教育的意図をもって展開することで1年生の早期であっても看護学への取り組み姿勢

等の一定の教育効果が得られたと考える。

しかしながら、現段階では看護理論に関する学生の理解は十分とは言えない事実も存在する。したがって、今後の課題は学年進行に伴い、看護学の各専門科目において1年次の学生の学びや認識を継続的に刺激あるいは補足していくことが教員の役割であると考えられる。

例えば、看護過程のそれぞれの段階での活用の仕方¹⁾、概念の本質の理解等の指導である。また、学生の看護実践への活用意思が高いことを踏まえて、今後の臨地実習でどのように刺激していく必要があるのかを教育側として検討していく必要がある。

4. 本研究の限界と展望

本研究の限界は、データが提出されたレポートからの抽出であり、学生からの聞き取りをしていないことである。したがって、十分な内容とは言えないこと、内容は評価を意識した内容が混在していることは否めない。しかしながら、レポートは学生の思いや考え等が記載されていることから一定の信頼性は確保できているといえる。

本調査の結果は看護理論を臨地実習等で活用する能力育成に資すると考える。さらに、結果を学内に公表することにより教員間で内容の共有ができ、実効ある指導に役立つ資料となり得る。

VI. 結論

本調査により講義科目「看護理論と看護実践への活用」受講後の学生の内面に形成された看護理論への認識として以下のことが明らか

表4 授業科目「看護理論と看護実践への活用」の目標

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 看護理論とは何か、看護実践における看護理論の必要性・意義について説明できる。 2. 主な看護理論を学習し、看護現象と看護理論の結びつきを認識できる。 3. グループワーク・プレゼンテーションを体験し、意見交換を行うことで自己の考えを相手に伝えることができる。 |
|--|

かになった。

1. 学生の看護理論に関する関心は88.4%と高く、実践に活用したい意思も高かった。
2. 提出された課題レポートから抽出された7カテゴリーは【看護理論の必要性】【看護実践への活用】【援助の取り組み姿勢】【よりよい看護の追及】【自己を高める】【今後の展望】【理論家の人物像からの刺激】であった。
3. サブカテゴリーは20で〔看護理論を学ぶ意義〕〔看護理論を学ぶことへの意欲〕〔看護実践への活用の意義〕〔看護実践への意欲〕〔看護実践への具体化〕〔看護実践への活用の困難感〕〔目標とする援助〕〔複数の理論の活用〕〔看護の方向性の気づき〕〔看護師の役割〕〔看護観の探求〕〔コミュニケーション能力を磨く〕〔気づく力を鍛える〕〔大学生活での様々な挑戦〕〔看護理論を発展させる努力〕〔視野を広げる〕〔患者と共に成長する〕〔自己の課題〕〔目指す看護師像〕〔心に響く経験〕であった。

以上より、看護理論は難しいと言われているが、1年次においても看護理論の意義や活用意思等の認識を持つことができ、将来の自己の在りかたを模索する姿勢を築くことが可能であることが示された。今後は1年次の学びをどう継続していくか、指導者自身も学生のニーズに応えられる研鑽が必要であることが考えられた。

謝辞：本研究を行うにあたり、ご協力いただきました皆さまに心よりお礼申し上げます。

引用文献

- 1) 文科省 (2017)：平成29年大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会、

- https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/_icsFiles/afldfile/2017/10/31/1397885_1 (2022.7.10検索)
- 2) 桑野紀子 (2014)：看護理論の概要, 看護科学研究, 12(2), 68-75, 2014.
 - 3) 金子裕香, 志水直子 (2021)：精神科病棟に勤務する1～3年看護師のコミュニケーションの現状, 国立病院機構熊本医療センター医学雑誌, 21(1), 50-61.
 - 4) 濱谷直 (2020)：発声によるコミュニケーションが困難な舌咽頭癌終末期患者との信頼関係の構築—ペプロウの人間関係の看護論を用いて, KKR札幌医療センター医学雑誌, 17(1), 41-45.
 - 5) 大森琴巳, 吉田裕美, 深尾亜由美, 高橋孝夫 (2015)：ストーマセルフケアの獲得についての検討—キングの看護理論を用いた振り返り—, 東海ストーマ・排泄リハビリテーション研究会誌, 35(1), 12-20.
 - 6) 葵小瑛 (2019)：看護学生の精神障がい者社会復帰施設実習での学び—トラベルビー看護理論の視点による分析—, 桜花女子大学看護保健学部紀, 9, 15-28.
 - 7) 牛超幸子, 三木章子, 高橋順子 (2014)：母性看護学実習におけるオレム看護論を基盤にした看護学生の対象者理解, 母性衛生, 55(2), 494-501.
 - 8) 今井芳江, 板東孝枝, 高橋亜希, 近藤和也 (2019)：高齢者看護学実習におけるオレム看護理論の活用による看護学生の高齢患者の理解の実態, 四国医学雑誌, 75(5-6), 79-184.
 - 9) 葛西朱美 (2011)：ロイ適応理論を活用した看護過程の展開—直腸癌直腸切除術後の患者の適応を考える, 東都医療大学紀要, 1(1), 64-71.
 - 10) 齊藤しのぶ, 河部房子, 和住淑子 (2008)：看護理論を組み込んだ教育プログラム受講後の経験を積んだ看護師の看護実践力の発展, 千葉大学看護学部紀要, 30, 1-9.
 - 11) 簀持知恵子, 望月美鶴 (2002)：セクシュアリティ教育における看護理論・看護モデルの活用可能性の検討—看護理論家の性に関する記述, 学生の実習記録の実証的分析から—, 山梨県立看護短期大学紀要, 8(1), 51-63.